

# 日本財団補助金による 2000年度日中医学学術交流促進事業

## ②. 学会開催助成

(3) 「日本生薬学会第47回(2000年)年会」

日本財団助成金による

2000年度日中医学学术交流促進事業報告書

—学会開催に対する助成—

2000年10月27日

財団法人 日中医学協会  
理事長 中島章 殿



報告者氏名 奥山 徹  
所属・役職 明治薬科大学・教授  
所在地 〒204-8588 清瀬市野塩 2-522-1  
電話 0424-95-8904 内線 \_\_\_\_\_

講演集・シンポジウム写真等学会に関する資料を添付

学会・学术交流の名称 日本生薬学会 第47回(2000年)年会  
テーマ 「伝承薬物と代替医療を語る」、「中西医薬結合を目指して」  
主催団体 日本生薬学会  
代表者 年会会長 奥山 徹  
期間・開催地 2000年(平成12年)9月7日(木) - 9月8日(金) 所沢市民文化センター 所沢市並木1-9-1  
参加者数 日本側 640 名 中国側 約 30 名  
招へい・派遣目的 2つのシンポジウム「伝承薬物と代替医療を語る」と「中西医薬結合を目指して」で招待講演をしていただいた。

1. 招へい・派遣研究者 人数 3 人 記入欄不足の場合は別紙を添付。

| 氏 名   | 所 属 ・ 役 職         | 研 究 分 野   |
|-------|-------------------|-----------|
| 匡 海 学 | 黒竜江中医薬大学・教授、理事長   | 生薬学、天然物化学 |
| 王 崢 涛 | 中国薬科大学教授、生薬学研究室主任 | 生薬学、天然物化学 |
| 蔡 少 青 | 中国北京医科大学薬学院       | 生薬学、天然物化学 |

滞 在 期 間 自 2000年 9 月 6 日 至 2000年 9 月 9 日

## 2. 主な滞在日程

### 匡海学

|             |                        |
|-------------|------------------------|
| 平成12年9月6、7日 | 所沢パークホテル 宿泊            |
| 平成12年9月8日   | 成田エアポートワシントンホテル 宿泊     |
| 平成12年9月7、8日 | 日本生薬学会第47回（2000年）年会に参加 |

### 王輝滂

|               |                        |
|---------------|------------------------|
| 平成12年9月6、7、8日 | 所沢パークホテル 宿泊            |
| 平成12年9月7、8日   | 日本生薬学会第47回（2000年）年会に参加 |

### 蔡少青

|               |                        |
|---------------|------------------------|
| 平成12年9月6、7、8日 | 所沢パークホテル 宿泊            |
| 平成12年9月7、8日   | 日本生薬学会第47回（2000年）年会に参加 |

## 学会名称・日本生薬学会第 47 回（2000 年）年会

学会テーマ：「伝承薬物と代替医療を語る」、「中西医薬結合を目指して」

日本側主催代表者氏名・奥山 徹・明治薬科大学天然薬物学・教授

中国側代表者氏名・匡海学 黒竜江中医薬大学・教授、理事長

王曄涛 中国薬科大学教授・生薬学研究室主任

蔡少青 中国北京医科大学薬学院

### 学会報告

報告者氏名・日本生薬学会第 47 回（2000 年）年会会長・奥山 徹（明治薬科大学天然薬物学・教授）

日本生薬学会第 47 回（2000 年）年会（東京）は、9 月 7 日（木）、8 日（金）の両日、2000 年という節目の年に、埼玉県所沢市民文化センター MUSE で開催をさせていただきました。

日本生薬学の会長講演は会期の冒頭に持って参りました。三川潮会長には、会員、参加者一同に対する 2000 年の節目のメッセージを送る形で講演をいただきました。更に、本大会では“東洋医学・漢方診療の実践と天然薬物の日本における係わりと中国での現状”、並びに数年来話題になっている“代替医療”を取り上げました。この観点に立って、特別講演とシンポジウムを組みました。

特別講演は、「漢方診療の実際と課題」として、北里研究所東洋医学研究所・花輪壽彦所長、瀋陽薬科大学・姚新生学長には「中国で中薬および天然薬物についての研究動態」の演題で講演をしていただきました。花輪教授によると、“日本の医療機関の 7-8 割近くが漢方薬を診療に導入している。漢方が最も重視するのは「未病を治す」考えであり、西洋医学的病名がつく前に不調和を改善することにある。また、21 世紀の医学の潮流は西洋医学と東洋医学のお互いの長短を補充・融合し、これを支える生薬学・漢方医薬学への期待は極めて大きい”と力説されました。姚新生教授は、中国における特許権の普及に長い間努めてこられました。姚先生と御一緒に中国国内を講演旅行した際にも、“中国が国際社会で取り残されないようにするためには特許の必要性がある”と力説されていた事が思い起こされます。化合物特許権が確立されて 7 年目ということでの中薬天然薬物の研究の現状をご紹介いただきましたが、中国人のエネルギーと大きな力を持って研究開発に取り組んでいる様子がヒシヒシと感じられました。

1 日目のシンポジウムは、「伝承薬物と代替医療を語る」のテーマで、山崎幹夫先生にオーガナイザーとして、時流に乗った形で魅了していただきました。アメリカで台頭してきた背景と現状紹介を「アメリカにおける代替医療」として、糸川秀治先生（ノースカロライナ大学）に紹介していただきました。国立医薬品食品衛生研究所・佐竹元吉部長は、「食品薬区分の見直しと生薬分野からの提言」として、伝統医療に対する WHO の動き、代替医療に取り組む日本の行政上の対策、食薬区分の見直しの改正点と今後の課題、副作用に取り組む本格的な姿勢を述べられました。「中国における伝承薬物と代替医療」として、黒竜江中医薬大学副学長、理事長・匡海学教授は、56 民族からなる中国でのそれぞれの民族独自の伝承医学・伝承薬物の発展とその使い方の紹介、更に、これらを基本にした現在の中医薬の利用状況について語っていただきました。

加えて、熊谷千津（アロマセラピスト）先生にアロマセラピーを活用して、チーム医療の一員として

医療現場で貢献している様子を紹介していただいたところ、会場からは実に大きな反響をいただきました。懇親会では言うまでもなく、学会終了後も何名かの方々からのお問い合わせと、多くの励ましのお手紙をいただきました。

2 日目の「中西医薬結合を目指して」のシンポジウムは、名古屋市立大学・荻原幸夫教授に担当していただきました。中国側のシンポジストとして、中国科学院上海薬物研究所・勞愛娜教授には「中西医薬結合を目指した中薬研究の現状及び薬食同源としての韭 (*Allium tuberosum*) の成分研究」、中国薬科大学・王曄涛教授には、「The Utilization, Chemical Constituents and Quality Evaluation of Roots and Leaves of *Lindera aggregata* (Wuyaku)」, 北京大学薬学院・蔡少青教授には「漢方方剤により中西医薬結合ポイントを探す」のテーマで講演をしていただきました。次に、北里研究所 東洋医学総合研究所・山田陽城教授には「十全大補湯の腸管免疫系に対する作用と作用成分」のテーマで、腸管免疫系や全身免疫系におけるサイトカイン産生、肝免疫系に対する作用、造血系に対する作用、腸管免疫促進作用の作用成分と複合作用についてご講演をいただき、十全大補湯の有効性の裏付けを強調されました。

学術奨励賞受賞講演は第5回目を数えております。今回は、「高等植物におけるステロール及びトリテルペンの生合成研究」(東京大学大学院薬学研究科天然物化学教室・渋谷雅明)、「ムラサキ培養細胞におけるシコニン生合成遺伝子の解析とその光応答」(京都大学大学院生命科学研究科・矢崎一史)、「和漢薬の基源に関する研究—組織形態学、ケモタキソノミー、遺伝子解析の応用—」(富山医科薬科大学和漢薬研究所・小松かつ子)の3名の若き先生方が受賞講演されました。

一般参加者は518名で、生薬学会員以外の参加者は83名、学生会員は95名で、招待者と事務局関係者を合わせて670名程の参加者を数えました。一般講演は165演題(口頭発表54題・ポスター発表111題)で行われました。プログラムの編成は、従来とは少々異なるジャンルを取り入れ、幅広いエントリーが出来るように致しました。大・中・小分類に対応する項目を組み込ませる形で申し込んでいただき、これに合わせて編成いたしました。

日本生薬学会総会の開催、受賞者・新名誉会員・新永年会員の先生方の表彰式滞りなく進行させていただきました。また、総会に向けた前日の会長・副会長・三役会、役員会、並びに評議委員会は明治薬科大学で行われました。

懇親会は、会場への移動時間を出来るだけ短かにとの会員の方々からの要望に応えるべく、同じホールで開催させていただきました。予想以上のご好評をいただき感謝しております。

日本生薬学会は国内での学会でありますので、従来は外国から「特別講演」や「シンポジウム」に招待講演者として招へいされることはありませんでした。この度は、「日中医学協力事業 学会開催助成」を頂けたことにより、国際的な感覚で、日中の学術交流を遺憾なく発揮することが出来ました。学会参加者から大きな喜びをもって感謝されました。ここに、大会開催の責任者として、深く感謝申し上げます。